



1月3日 奥都城初詣にて森健心氏を表彰する朝岡光男会長



発行所

大牟田・荒尾地区与論会
発行人・朝岡 光 男
TEL 0944-56-7510

第130号

令和3年

「春季大祭中止」のお知らせ

今年の春季大祭は新型コロナウイルス感染状況「福岡県は解除・1か月間の経過処置」を踏まえ、中止とします。

なお、神事は役員のみで行いますので、ご理解とご了承をお願いします。当日、奥都城は開放しますので、お参りは各自お願いします。時間は左記の通りです。

4月は年間会費の納入月になっております。毎年地区長さんが訪問して戴いておりましたが新型コロナウイルス感染対策として、今回はこの与論会だよりに振込用紙を添付しておりますので、各自振込をお願いします。

秋季大祭では、皆様とお会いできることを期待しております。

一、日時 4月4日(日) 午前10時～12時

注意事項

- 一、『検温』『消毒』を実施。必ず『マスク着用』。
- 一、奥都城内は三密にならない様お願いします。

会費の納入状況は会計の出村進迄問い合わせをお願いします。

携帯 090-11192-2998 まで

与論会の動き

自 令和3年1月
至 令和3年3月

12月3日 宅峰中学生徒奥都城訪問

1月3日 奥都城初詣 新型コロナ対策を徹底

与論会役員及び 地区長改選のお知らせ

各地区長さんに於かれましては、会と会員皆様との重要な役を担っていただき厚くお礼申し上げます。

さて、今年度は役員・地区長さんの改選期になっております。地区長さんには、大変お忙しいところ恐縮ですが次期地区長さんを「5月末」までに決めていただき、決まり次第朝岡会長まで連絡をお願いします。

出来るだけ皆さん交代で役を引き受けて下さい。引き続き役員を継続されている方には感謝いたしております。与論会の継続、発展のため皆様方のご協力をお願いします。

任期は令和3年6月1日より令和5年5月31日までの2年間で

す。
なお、7月中旬に第45回大牟田・荒尾地区与論会定期総会を三港与洲会館にて開催予定です、これも、新型コロナウィルスのワクチンが出回り次第となりますが、その折は引継打合せがありますので新・旧地区長さんのご出席をご案内いたしますのでよろしくお願いします。

宅峰中学生 奥都城に学ぶ

先般、「大牟田市立宅峰中学校校長幸川和秀」さんより申し入れがあり、本校では1年生は現在、「地域の歴史(炭鉱を中心に)調査体験学習、人の心に学ぼう」という「地域ふれあい体験学習」の中で宅訪中学校周辺のフィールドワークを計画しています。その学習の中で、与洲奥都城の敷地内で、林竹美さんにお願ひして与論島と大牟田の炭鉱のかかりについて説明をうかがう計画をしております。つきましては、敷地内への訪問や移住100周年記念碑等の見学の許可を、お願いいたしますと依頼があり、了承。朝岡光男会長他与論会役員が参加しました。

令和2年12月3日に1学年生徒合計156名、職員10名が5グループに分かれ、三池集治監・一の浦囚人墓地・宮浦石炭記念公園・延命公園内三川坑炭塵爆発慰霊碑・与洲奥都城と徒歩にてグループで来られ、林竹美さんが説明されました。



先祖に祈りささげる

会員が初詣で交流

大牟田・荒尾
地区与論会

大牟田・荒尾地区与論会(朝岡光男会長)は3日、大牟田市昭和町の与洲奥都城で初詣を開催。会員などが訪れて参拝した。先祖たちへ感謝の気持ちを示し、交流を深めた。

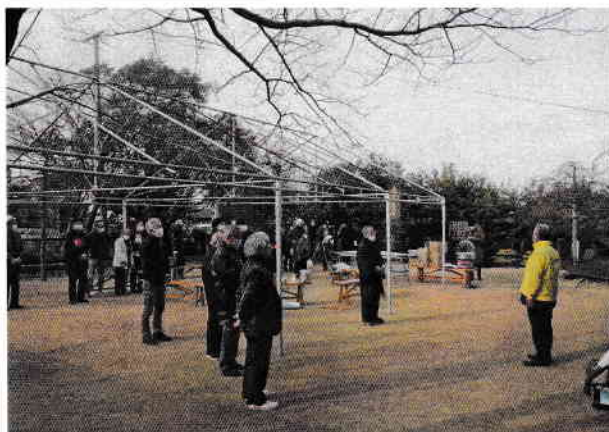
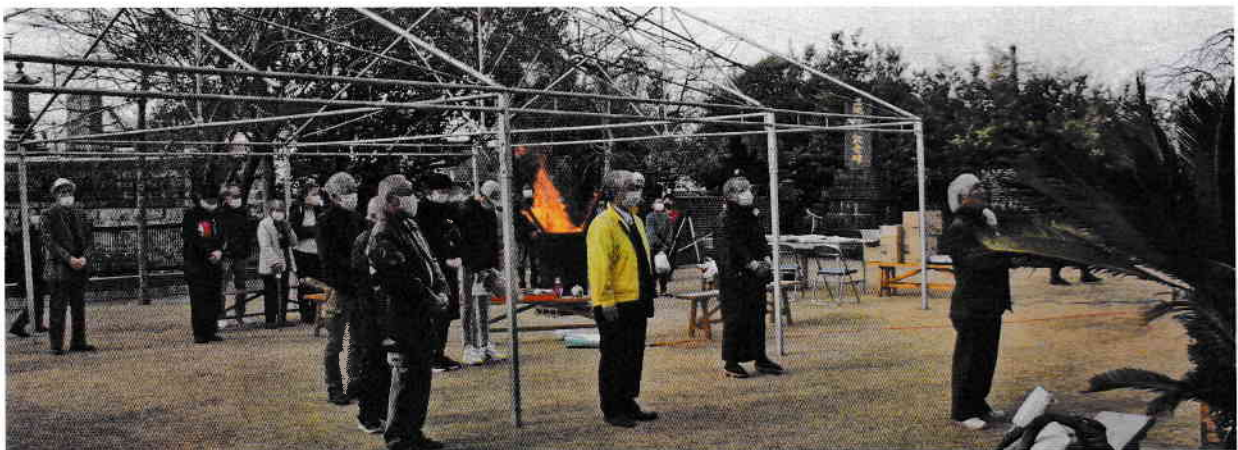
同会では春と秋の大祭をはじめ、正月やお盆にも奥都城に集って先祖の苦難の歴史をしのび、功績を後世へ伝えている。

初詣は新型コロナウイルス感染拡大防止対策をして実施。まず朝岡会長が新年の幕開けに「昨年は一年を通して新型コロナウイルスの影響を受けた年だった。早く収束することを願うばかり。今年はコロナに負けない年にしたい」と話した。続いて、参列者たちが先祖に祈りをささげた。

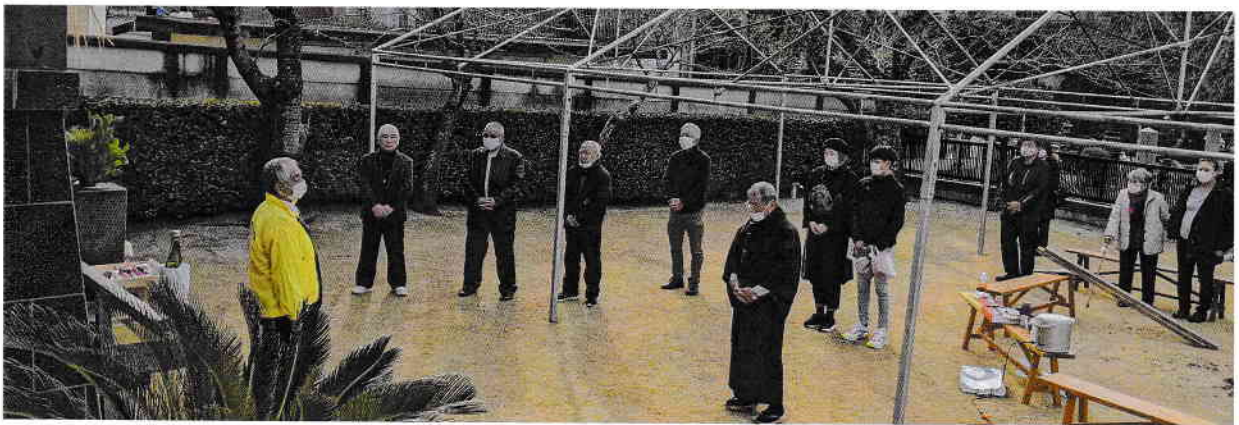
また、2019年全国総合体育大会の柔道個人100キ級で優勝した大牟田高校柔道部出身の森健心さん(明治大)へ与論翔励会からの表彰状伝達もあった。

森さんは「大学に入って練習のレベルも上がっている。次回のパリオリンピックを目指したい」と力強く活躍を誓っていた。

1月7日 有明新報



令和3年 初詣



親子三代揃い踏み。左より森整昭さん・健心さん・父 整隆さん

令和3年 初詣



義援金をお届けしました

令和2年12月20日、「与論島新型コロナウイルス感染症対策支援と大牟田市水害に伴う被災者義援金のご案内」を呼び掛け、皆様からお預かりした大雨水害被災者義援金総額219万9500円を(1軒当たり15万7千円・端数切捨て)お届けしました。

今回の義援金は床上限定としましたが、お届け先は水害で住めなくなったので全面改装中の処や、すでに借家は解体されて公営住宅に引っ越ししている方、自宅を解体されて娘さんの家に引っ越しされた方、訪れた先々での被災状況が改めて甚大だったと痛感致しました。

床下浸水した処もカビの発生や、臭いが取れないところもあり復興に時間がかかるようです。

お届けした処。

山下義明様・川口哲治様・堀田雅史様・田畑重美様

田畑茂子様・町謙二様・松井清一様・川畑幸雄様

故、黒田チヨ様(届け先・馬場武彦様)

故、酒匂千代子様(届け先・境正昭様)

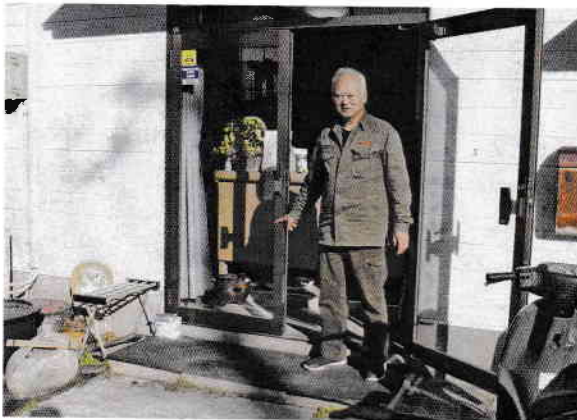
故、堀チヨ様(届け先・佐藤万里子様)

故、加藤キヨコ様(届け先・野中トモ子様)

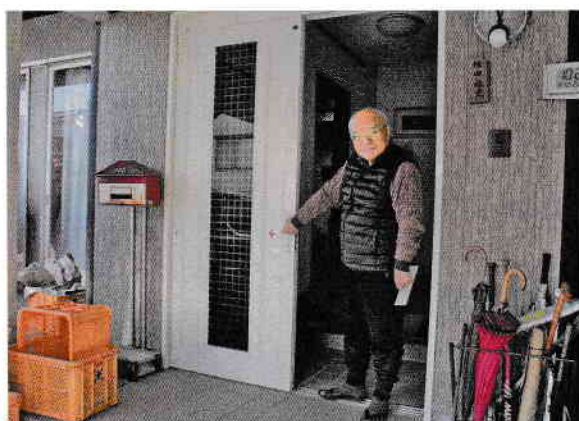
小林八重子様(郵送)

西脇和江様(郵送)以上14軒です。

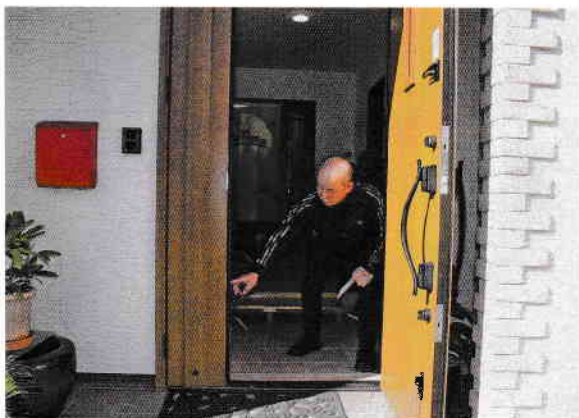
浸水状況も写真で示しておりますのでご参照に。



被災状況 (浸水箇所を指示)



被災状況 (浸水個所を指示)



海と人 共生へ思い共有

海洋教育 子どもサミット 九州・沖縄の学校集う

海洋教育子どもサミット2021もおおむたが22日、大牟田文化会館で開催された。大牟田市内の4小学校や鹿児島県、沖縄県の海洋教育に取り組む小中学校の児童生徒らが参加。新型コロナウイルス感染症対策で、直接の対面はかなわなかったものの、オンラインでつながり、海と人との共生に向けて意見を交わし、思いを共有した。

大牟田市教育委員会と市海洋教育推進協議会、東京大学大学院教育学研究科付属海洋教育センターの主催。公益財団法人日本財団共催。鹿児島県与論町と沖縄県竹富町、同県糸満市の各教育委員会後援。

海洋教育を通じ「海に親しみ」「海を知り」「海を活用し」「海を守る」学習を進めてきた九州・沖縄地区の小学校、義務教育学校の子どもたちが交流や学びを深める場として実施。今回は文化会館と各学校や機関をオンラインで結んだ。

参加校は大牟田市のみならず、天領、天の原、駿馬の各小学校と、鹿児島県与論町の茶花小学校、沖縄県糸満市の糸満、糸満南両小学校、竹富町の船浮小中学校、白浜小学校、上原小学校、船浦中学校(視聴校)、西表小中学校(同)、古見小学校(同)。

最初に「水産資源と環境の視点」「海に関係する資源の視点」「海の活用の視点」をテーマにグループに分かれ、画面越しにポスターセッション。

この後、「わたしたちがつくる未来の海」を全体テーマにパネ

ルディスカッションがあった。地域の海の自慢や心配事などについて船浮小中学校、天の原小、白浜小の児童生徒が意見。天の原小は有明海でのノリ養殖や希少な生き物といった自慢の一方で、環境による変化を懸念。沖縄の学校は釣りや泳ぎで親しんできた海の珊瑚が減少していることや、また白化している状況を述べた。問題点を踏まえ、参加の各校からも「節電」「家庭排水をきれいな状態に」「ごみは持ち帰る」との声が上がった。さらに「未来の海をつくるために」と、「リサイクルをする」「ポスターやゲーム、動画を作って、たくさんの人に地球温暖化を知ってほしい」などの声が寄せられた。

指導・助言を担当した東京大学大学院教育学研究科付属海洋教育センター主幹研究員の及川幸彦さんは「一緒に学ぶことは大事。ものの見方や考え方が広がる」とし、発表を振り返った後、バランスやつながりをキーワードに、各地域で海の豊かな自然環境を守っていく児童生徒へ「心は一つ。自分たちが主役ということを忘れないで」などと呼び掛けた。

1月26日 有明新報



田畑前実さんのアルバムの中に、有明新報記事「与論ふるさと里帰り」のことを「切り抜き」し、保存してありましたので、これを掲載します。

与論の人たちの里帰りに拍手を

生まれ育った南西諸島・与論島を離れ、遠い大牟田の三池炭鉱に働きに出てきた人たちが約60人が、月末にふるさと・与論島へ里帰りする。与論島の人たちにとって、三井の石炭は生活の支えであった。この石炭を大牟田と与論島の結びつきの記念品として持っていく。「こんな石炭によって私たちは生活し栄えてきた」と島の人に訴え、こどもたちの勉強の資料として贈るのだ。石炭は四山鉦から掘り出された3^キのかたまり6個と15^キのかたまり1個。島の役場や学校にプレゼントする。

与論島の人たちと三池炭鉱の結びつきは明治32年から始まる。その前年与論島を襲った未曾有の台風は、島のほとんど全戸を倒し、直後につづく干ばつ、悪疫の流行に島は「生き地獄」と化した。「三池炭鉱に働きに来ないか」という誘いに応じて、島の人たち約240人が海を渡って長崎県口之津に移住した。そのころ三池炭は、有明海が浅海であるため船積みされず、団平船で沖積みして口之津まで運んでいた。そのあと三池港ができてから、与論島の人たちは口之津から大牟田にやってきた。三池炭鉱でも、やはり船積みが主な仕事で、島の人たちは新港社宅に集まって住んだ。

いま大牟田・荒尾に与論島の人たちは約1800人が残っている。その人たちは大牟田・荒尾を「第二の与論島」と呼ぶ。これは大牟田・荒尾への愛着のふかさである。移住してから80年の歴史をふり返っても、楽しい事ばかりでなかったが、生活はもうす

っかり根付いている。この地によい相手を見つけて結婚している「二世」も多い。

延命公園に与論島の人たちの奥都城(墓)がある。毎年春秋に大祭を行っているが、この大祭には、北は北海道から南は沖縄まで全国各地の島出身の仲間が集まってくる。その人たちには大牟田・荒尾が「島の人たちの飛躍の地になった」という感慨があるのだ。与論島には島で生まれた独自の民謡がある。この民謡は、島から来た人たちにとっては「母の子守歌」だ。宴会のときなどに三味線に合わせてよく歌う。しかし与論島では、すでにこの民謡を伝える人もほとんどいない。島はいま観光の島になって蛇皮線はギターに代わり、民謡は流行歌にかわった。このため、こんどの里帰りでは「与論島の伝統の歌を絶やすな」と、歌い継いでくる。

また三味線愛好会の人たちは、夏まつりの民謡大会にも出場し、与論島の民謡と踊りを披露する。異色の「芸能」を美しく根づかせたいものである。

与論島出身のひとりには「三井さん、大牟田・荒尾のみなさんありがとう。80年の歴史の中で私たちは無事に暮らし栄えてきた。孫子の代まで「ご恩返し」をしたい。大牟田・荒尾と「泣き別れ」をするようなことがないよう頑張っていく」と言った。市民も、この心意気にこたえよう。里帰りには外部の政財界、文化団体の有志も招待していると聞く。1人でも多く同行して、島の人たちの「人間像」など認識を深めてきてもらいたい。与論島出身の人たちのこんどの里帰りは、大牟田・荒尾で刻んだ「栄光の歴史」を心に秘めていく壮途だ。胸を張って行ってもらいたい。市民も祝福の拍手をおくろう。

与論島里帰り交流をされた「三味線愛好会」会長の田畑前実さんに、有明新報社がインタビューされた当時の新聞が、前実さんのアルバムにありましたので記事をそのまま掲載します。

与論三味線好会の会長として 里帰りした田畑前実さん

大牟田・荒尾地区三味線愛好会が中心になって与論島へ里帰りされたそう。

昭和55年7月30日に出発し、8月11日に帰ってきました。

会員の他その家族や一般の方も合わせて総勢約90名。前の大牟田市長の古賀治さんや瓜生孝助役、現職市議員にも参加していただき盛況でした。

与論島と大牟田の関係は深いでしょう。

そうなんです。明治32年、つまり今から81年前、与論島は台風や干ばつにやられ、疫病も大流行して島民は暮らしに困ってしまつた。そこで私たちの先輩が県庁(鹿児島)へ救済を陳情したのです。たまたま三池炭鉱が石炭の船積み人夫を大量に募集しているのが分かり、当時の村長上野応介さんが自ら「三池へ行こう」と島民を誘い、第一陣250名を鹿児島県口之津に移住しました。明治33年のこと。このころはまだ三池港がなく、石炭は小舟で三池から口之津へ運びここで大きな船に積み替えていて、私たちの先輩はこの船積みに従事したのです。

大へんな苦労だったようで、三池に移られたのは。

明治42年三池港ができ、石炭の船積みが直接されるようになってからですが、その後も与論島から第2陣がやってきて、全部で1800〜2000人を数えたこともあるほど。

船積みだけでなく貯炭作業もしました。私は佐世保で兵隊を除隊後、昭和9年、叔父を頼って三池港務所に入りましたが、現在では2代目、3代目が大牟田はもちろん関東関西などへ働きに出、政治家や弁護士、医師、商業など広く活躍しております。ヨロン出身と冷たい目で見られたと聞きますが。

そういうことはないではなかったが、私たち自身が小さい島で生れたせいか閉鎖的で、内地の人とは言葉や風習も違うし、同じ地域にグループを作って固まって住んでいたため、周囲からは寄り付きにくい、変な連中だとみられたんじゃないでしょうか。が、とにかく仕事は頑張りました。なにぶん島では食えず大牟田へ来たものばかりだし、どんなに苦しくても、石にかじりついても家族の為、子供を1人前にするためにと働きました。

団結の強いあなたたちも三池争議中には結束がみだれたようですね。

あの時は親子でも意見が食い違い第一組合と第二組合に別れ、社宅や職場で対立しました。これではいけないと思いつつ共通の目的を作ればまとまるだろうと与論民謡保存会を結成し、ふるさとを思い出しました。幸いこれには第一も第二もなく、2〜30人参加し、昭和36年に第1回の発表会を開くまでになりました。三池港務所や鉱業所の協力で会社の広場に舞台をかけ、島に伝わる民謡「いきんとう」や沖縄民謡「御前風」をうたい、踊って楽しみ、打ち解けたものです。

天領町に三味線練習場がありますね。

4年前、市議員の松井才円さんが土地を提供してくれ建てました。今でも与論会の会議や三味線、踊りの練習に使っています。島では昔から男3人寄ると沙美銭三味線をひき、うたを歌い、焼

酎を飲んで楽しんだものですから、大牟田でもできるだけそうした集いを持ち、みんなで慰め、励まし、そしてふるさとを忘れないように努めているのです。延命公園西側の共同墓地(奥都城)こちらで死んだ先輩たちの霊を慰めるため市にお願いして作り、毎年春と秋の2回お祭りをしています。島の者は祖先崇拜が強いんですよ。

ところでこんどの与論島への旅に三池の石炭を持っていかれ、大歓迎されたとか。

会社にお願いでわざわざ大きな石炭を坑内から運び出してもらい持って帰りました。島で「これが先輩たちが生活の糧に取り組んだ石炭だ。今日を築いた大切なものだ」と役場や小中学校へ寄贈しました。与論小学校には理科の教材として全国の石がそろっていましたが、石炭はありませんで、子供たちは、燃える石を見てびっくり、このほか島から昭和28年に港務所へ贈られたソテツの木が今ではこんなに大きくなっているとその写真を持って行ったが、昔この木を大牟田へ送るのを手伝った人が生きていて感激していました。島では我々を大歓迎し、町長は「私のおじさんも三池で働いた。石炭は与論島を助けた先輩たちの汗と涙と血のにじむ貴重品だ」と喜んでくれました。サンゴ祭で三味線愛好会と島の保存会が交流し、民謡の他大牟田の炭坑節も飛び出して大賑わいでした。生まれて初めて故郷の土を踏んだ人もいて、今度の里帰りは本当に有意義でした。

私は15年前に会社を定年で辞めてから暇だし、時々帰省するので今では故郷の変化にびっくりすることは少ないが、何十年ぶりかで帰った人たちには今昔の感がたでしょう。与論島も政府の

離島振興によってかなり良くなっています。観光化も進んでいる。変に荒らされては困るが、ほかに大きな産業のない離島だけに観光に発展を求めるのもある程度やむをえないでしょう。鹿児島島の最南端、人情は厚く、青い海とサトウキビ、焼酎、貝細工などのお土産がある与論島、鹿児島から船便を利用して、1週間泊まりで12万〜13万円あれば楽しめます。大牟田からもぜひお出かけください。

ふるさとはいいと言いますが、大牟田はどうですか。

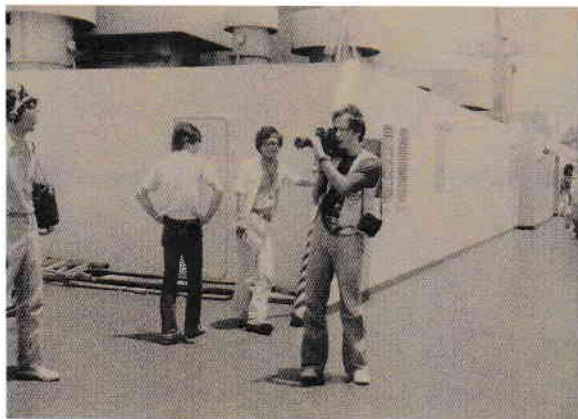
第2のふるさとはです。生活の城をおく大切な町、先輩たちが石炭によって助けられた三池。悪く思うはずがありません。これからも市の発展に私たちも全力を挙げたい。

昭和55年8月29日



練習に励む三味線愛好会の皆さん

田畑前実さん写真より



田畑前実さん写真より



田畑前実さん写真より



田畑前実さん写真より



田畑前実さん写真より



有馬さんの100歳祝福

ゴイジー 荒尾市から記念品も

大牟田市南船津町の介護付有料老人ホーム「ゴイジー」ヴィラ大牟田を利用する有馬キクさんの100歳を祝う荒尾市からの記念品が18日に同施設へ届けられた。二男の菊夫さん(71)をはじめ家族、スタッフらが祝福し、喜びに満ちたひとときを過ごした。

新型コロナウイルス感染症の状況により、浅田敏彦荒尾市長の訪問はかなわなかったものの、同市四ツ山町、伊藤医院の関連施設の同施設に市職員が訪れ、有馬さんに記念品を手渡した。

また施設内では感染対策を施し、花などを使って白やピンク、金、赤といった華やかな色で飾り、有馬さんを祝福。子ども一同からの「おばあちゃんの歩んできた百年の歴史の偉大さに敬服いたします。まだまだ人生の途中。」

コーシーヴィラの最高齢を目指してマイペースでお過ごしください」との言葉も送られた。

与論の出身で、機織りをしていて、家族の着物も作っていたという有馬さん。着物姿で紅をさし、「こんなにしてもらってうれしい」などと、にこやかな表情を見せていた。

2月25日

有明新報



100歳のお祝いを受け笑顔を見せた有馬さん(与論会会員)

恵ちゃんシゲは生きる

林竹美さんが堀岡治シゲコさんの奥さんで堀恵子シゲコさんの本を出版されました。

堀恵子さんは現在98歳です、ご主人の堀岡治さんは平成27年に亡くなり、お一人で生活しております。現在も記憶力抜群である。長い人生をいろんなことがあっても、その現実をしつかりと受け止め、しなやかな強さで道を切り開いてこられた人生「戦争より恐ろしいものはありません。生きとけば何とかなるもんです。」という底力を聞き語りの中で語っております。

【林竹美さんは手鎌小学校を最後に定年退職。与論教育文化訪問団の一員として毎回参加しております。】

大牟田・荒尾地区与論会で5冊購入しておりますので、貸し出し致します。また、購入希望者の方はご連絡ください。



林竹美さん著「恵ちゃんシゲは生きる」

口之津移住百年祭記念誌

与論島から口之津へ
そして三池へ

集団移住の発端

☆

集団移住の契機となったものは、明治三十一年の台風による飢饉であったが、人夫供給源として受け容れる状況が、当時、長崎県の口之津港に発生していた。

この状況は、三池炭鉱の出炭量の増大によってもたらされたものである。

これらの状況の中で、打開に動いていた人々の間に、鹿児島県庁を中心に関係が生じ、決断が生まれ、集団移住が実現したわけであるが、それらの状況をこれから辿ってみたいと思う。

三池炭鉱が三井の経営に移ったのは、明治二十二年である。

それ以後の三池は、豊かな財力と、恵まれた自然条件と、新技術の導入によって、急速に発展していった。

これを出炭量において見ると、三井の経営に移った年には、四万六千トンであった出炭高が、明治二十八年には六万九千トン、明治三十八年には一三万一千トン、明治四十五年には、二一七万三千トンに増加している。

三池炭鉱の官営時代の明治十一年以来、明治四十二年の三池港完成まで、三池炭の積み出しは、長崎県の口之津港であった。

石炭の輸送販売は、三井物産の手によって行われていた。

口之津港における石炭の荷役作業は、その当初から口之津港積み出し全廃の大正十二年に至る五十年あまり、地元の南彦七郎が請負っていた。

南彦七郎は船積み人夫を、近郷の農民から求めていたが、口之津港における石炭取扱量の増大に伴い、人夫の補充に苦慮した。このとき新たに人夫募集の対象地として注目を浴びたのが、奄

美大島群島である。

明治三十一年七月に沖永良部島と与論島を襲った暴風雨の被害損失は、未曾有のものであった。記録によってみると、日根野侍従武官は勅使としてわざわざ両島に下島して救助金として三千元を下賜されたところである。

随行した福山大島島司は、両島の農作物のその他の被害のよる深刻を飢饉に瀕している惨状を見て大いに驚き、島民を集めて講話をなし翌年一月に帰庁されている。

この台風によって前年の一月に新築した校舎が倒壊している。新校舎は長さ十五間、横五間の校舎で、大きな柱、大きな桁を以って思う存分、沖縄の名大工が、堅牢を誇った学校であった。「与論島郷土史」には……上野応介戸長を泣かせた台風であったのである。……と記されている。

新校舎が飛ぶ程の大風であったのでほとんどの民家は倒壊したのであろう。

台風、早ばつ、悪疫の大流行という生地獄に襲われ死者続出し、一家全員が罹病し、飢死した子を墓穴に葬る力さえなく、岩陰にこもぐるみ捨てる者もあつたと、古老は当時の惨状を語っている。

長崎県の口之津に生じた資本の渴きと、鹿児島島の最南端に発生した飢とが、関係者の努力によって結合されていくわけだが、その過程をつぎに辿ることにしよう。

第一次移民団長であり、第二の故郷建設の功労者である東元良の「口之津稼三池移住概況」の回顧録によると

(明治三十一年、三井物産口之津支店長・浅野長七殿、鹿児島島飢島ヨリ人夫募集ノ交渉ニ鹿児島県庁ニ知事ヲ訪問セラレタル際、大島々司モ与論及沖永良部両島ノ風害救助金請願ノタメ来鹿中ナリシタメ、両島ヨリ募集セラレテハトノ相談ヲサレタル処支店長モ快諾)

とある。時の大島々司福山宏は(任期明治三十一年十月、三十七年十一月)は、着任早々に餓死者続出という大惨事に直面したわけである。

鹿児島県庁にその被害報告と救援請願に出頭中、たまたま人夫募集の話を目にし、心中深く決するところがあつたと思われる。

この大災害の善後策として、両島民の口之津移住を考えたのである。

福山島司は沖永良部島民にも口之津移住を説いたが、与論島民を移民させることが先決であるとし、そのためにこの生地獄とも思われる与論の孤島に一カ月以上、翌三十二年一月までとどまつて、島民をととき、村の指導者上野応介を説きふせたのである。島民集会がいくどとなくもたれた。

口之津港の請負師南彦七郎も命を受けて、集団移住の推進のために来島し、その具体化のために奔走した。

こうした情勢の中で、村役場においては、上野戸長の英断によって、自分の娘婿で、村役場の書記に起用したばかりの東元良をその団長に決定し、移住民の獲得に当らせた。

村議梅花孝森らの有志がこれに協力しようやく、集団移住への歯車が回転をはじめた。

「与論島郷土史」に……かくて全島の最貧窮者、大負債者等が、多くは先発者となり云々とあるから、移住の勧誘は当初これらの人々に向けられたらしい。

これらの人々は、家人、膝素立として働いていたので、所有者である主家を説得するのにも相当のむずかしさがあつたことも想像に難くない。

島民の貧困を根本的に解決するためには、百年の大計のもとに、内地の一角に第二の故郷を建設すべきであると説得大いにつとめたが、その努力にも不拘らず、当初はなかなか募集に応ずる者が出なかつた。

内地はとても雪が深くて子供の育たない処だぞうだという流言や、

未経験の作業に対する危惧、交通不便で遠隔の地であることなどの理由によるものであろうが、島民にとつては島はそのまま局地的小宇宙であり、島以外の生活は考えられなかつたのである。飢餓線上を彷徨しながらも、募集に容易に踏み切れなかつたのもそこにある。

関係者一同の骨身惜しまぬ奔走の結果、ようやくにして二五〇名の応募者を集めることに成功した。

応募者は十三才より三十才位までの若者達で、妻帯者も幾組かあつた。

かくて三十二年二月下旬、島民総出の見送りのうちに、なつかしい故郷を後にした。途中各島の応募者を乗せ、総勢七百名の移民団は鹿児島港に無事到着した。

これより船を乗り換え、海路を口之津へ向つたのである。

口之津港に到着した移民団は、南彦七郎所有の長屋に収容され、一部は近郷の農家の納屋に分散収容された。

与論島出身者は、南彦七郎監督の下におかれ、各既成組に分散編入され、沖仲仕として働くことになつた。

かくして集団移住の第一歩を踏みだしたわけであるが、二月下旬とあつてみれば、南国育ちの島民はまず厳しい寒気にふるえ上つたことだろう。まさに移住後の苦闘の歴史は、そのように厳しいものであつた。

島民にとつて雪は恐ろしいものであつたらしく、口之津移住のときも、後の三池移住のときも、とても雪が深くて、子供など育たないぞうだ。ということが恐怖心を以つて語られていたと云う。ともあれ、眼前に雪を戴いて屹立する雲仙岳の雄姿を仰ぎ、遙々来つるものかな、と感慨ひとしおなるものがあつたらう。